第9回 さくらサミットin上越

開催日 1997年4月13日(日)13:00~17:00

会　場 上越市厚生南会館

主催:新潟県上越市

目次

さくらサミット憲章 …… 2
ごあいさつ …… 3
タイムスケジュール …… 4
講師プロフィール …… 5
参加自治体一覧 …… 6
参加自治体地図 …… 7
参加自治体紹介 …… 8

●北海道静内町…… 8
●宮城県柴田町…… 10
●秋田県角館町…… 12
●茨城県日立市…… 14
●群馬県鬼石町…… 16
●埼玉県幸手市…… 18
●東京都北区…… 20
●新潟県加治川村…… 22
●長野県高遠町…… 24
●奈良県吉野町…… 26
●鳥取県西伯町…… 28
●島根県木次町…… 30
●高知県佐川町…… 32
●長崎県大村市…… 34
●熊本県水上村…… 36
●宮崎県北郷町…… 38
●新潟県上越市…… 40

さくらサミット憲章（平成元年9月22日制定）

SUCCESS／成功
第１条：今後ともさくらサミットを開催し、サミットとサミットに参加するそれぞれの自治体のまちづくりを成功させるため、互いに取り組みを進めます。

APPROACH／接近
第２条：「21世紀のまちづくり」という目標を限りなく実現に近づけるため、相互に連携、協力しあって花を咲かせることができるように努めます。

KEYWORD／言葉
第３条：まちづくりの共通標榜である「桜」をキーワードとして、「桜」に関する人や物の交流、情報の交換を行い、新しいまちづくりの手がかりを見い出します。

UNITY／調和
第４条：文化、教育、福祉、産業、観光そして災害対策などにおいて、相互の連携、協力をとり、調和のとれたまちづくりを行うよう心がけます。

RELATION／縁
第５条：「桜」によって結ばれた縁を大切にし、互いに友好を深め、21世紀に向かって前進していきます。

AGREEMENT／合意
第６条：共通の目標に向け、ふれあいと連帯を築き、それぞれの自治体の進展と住民の生活文化向上に努めることに合意します。

ごあいさつ

上越市長
宮越　馨

桜のまち上越市へようこそ。心から歓迎申し上げます。

華やかに咲く桜は、わたしたちに春の感動を与えてくれる自然からの贈り物であります。ソメイヨシノを中心に3,400本もの桜が咲き誇り、日本三大夜桜のひとつに数えられている『高田城百万人観桜会』のさなか、第９回「さくらサミットin上越」を開催する運びとなりました。ご多忙の中、全国各地の市区町村長さんからご来越賜り、また、上越市出身の小澤普照さんからは、基調講演の講師としてお越しいただきこの上ない喜びであります。

今回のサミットのテーマは、「桜のまちづくりと住民参加」であります。古来から日本の文化や精神の創造に大きくかかわってきた「桜」をこれからのまちづくりにどう生かしていくか。また、先進自治体では住民と行政がどのようにして桜を守り、育てているかなど、貴重な意見交換の場となることを期待しております。

上越市では、昨年、市民との共同作品である自前の「のびやかＪプラン」を策定いたしました。今後30年にわたる超長期のまちづくり構想である本プランは、「みどりの生活快適都市・上越」を将来都市像に掲げ、30万人都市機能の整備を見据えた具体的、戦略的な施策の方向を明らかにしております。

夢あふれるこの計画に基づき、昨年、「１万本の桜が咲き誇るまちづくり推進委員会」を組織し、活動の翼を順調に広げております。この事業を推進するためにも、本日お集まりの皆さんからお知恵を大いに拝借したいと思っております。

今回のサミットを機に交流が一層深まることを祈念し、併せて皆さんのご健勝とご活躍をお祈り申し上げ、ごあいさつといたします。

タイムスケジュール

4月13日(日)

13：00 ― **開会**

13：10 ― **基調講演**
「桜を生かしたまちづくり」
講師／小澤普照

14：30 ― **サミット**
「桜のまちづくりと住民参加」
コーディネーター／泉　眞也
助言者／小澤普照
パネリスト／17自治体首長

記念植樹

17：00 ― **閉会**

同時開催イベント
◆桜の押し花コンクール、展示
4月12日(土)～20日(日)
◆さくらのまち特産品展示
4月13日(日)
(参加者には抽選で
特産品プレゼント)

講師プロフィール

基調講演講師

小澤普照（おざわ・ふしょう）

新潟県上越市出身。１９５７年４月東京大学農学部卒業、同年農林水産省入省。８５年高知営林局長、８６年林野庁指導部長、８９年同次長、９０年林野庁長官を歴任、９２年退職。現在は農林漁業信用基金副理事長、土地政策審議会委員、観光政策審議会委員、河川審議会委員などでご活躍されております。

サミット・コーディネーター

泉　眞也（いずみ・しんや）

環境デザイナー。JAPAN EXPO '97TOTTORI総合プロデューサー。東京芸術大学美術部工芸科卒業。高速道路の案内システムから“ラフォーレ原宿”に至るまで、幅広いデザインを手掛ける。第１回グッドデザイン賞、世界道路映画祭金賞。瀬戸大橋博覧会、横浜博覧会、国際花と緑の博覧会の総合プロデューサーなどを務める。

参加自治体一覧

北海道静内町長／増本　一男
宮城県柴田町長／平野　　博
秋田県角館町長／高橋　雄七
茨城県日立市長／飯山　利雄
群馬県鬼石町長／関口　茂樹
埼玉県幸手市長／増田　　実
東京都北区長／北本　正雄
新潟県加治川村長／高橋　公則
長野県高遠町長／北原　三平
奈良県吉野町長／福井　良盟
鳥取県西伯町長／坂本　昭文
島根県木次町長／田中　豊繁
高知県佐川町長／和田　啓作
長崎県大村市長／甲斐田國彦
熊本県水上村長／成尾　政紀
宮崎県北郷町長／植野　章一
新潟県上越市長／宮越　　馨

参加自治体地図

北海道静内町

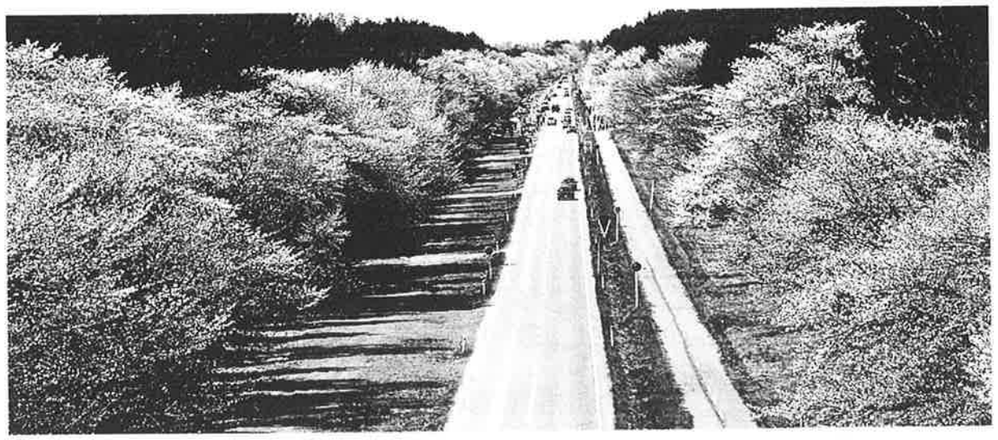
市町村の概要

雄大な日高山脈と太平洋に囲まれた競走馬のふるさと日高地方の中核都市。農林漁業の他各種の産業が発達した人口24,000人、9,600世帯の緑豊かな町。

桜の概要

直線７km“日本一の桜並木”として知られる二十間道路桜並木。道路幅が二十間(36ｍ)あることから二十間道路と呼ばれ親しまれるようになったこの道の誕生は明治36年のこと。当地を訪れる皇族等を迎えるために、幅二十間・長さ２里(８km)という雄大な行啓道路が造成され、桜の植栽は大正５年から７年にかけ３年の歳月を費やして当時の御料陵牧場職員が近隣の山々から移植し行われた。風雪に耐え、幾多の存亡の危機を乗り越え、咲き続ける桜は、ほとんどがエゾヤマザクラであることから、５月上旬の開花期には、美しさを競い合うかのように一斉に咲き誇り、桜吹雪となる壮大な桜絵巻は、観る者全てを圧倒する。日本の道百選等数々の栄誉を受けた桜並木はサラブレッドが駆け巡る周辺の牧場の緑と美しいコントラストを描きながら、北の大地に遅い春を告げる。

直線７kmに及ぶ二十間道路桜並木



桜の現状報告

平成６年度より取り組んでいる“桜の茎頂培養”は悪化した気象条件等幾多の難題と遭遇しながらも、着実に成長しており、平成10年春の引渡を予定している。その後の対応として、各施設における植栽のほか、町民への各戸配布等を検討しており、現在その準備を進めている。しかし、配布を予定しているエゾヤマザクラが個人の家庭では大きすぎる等の課題も残されており、その対策も含めて“他に例を見ない桜のまちづくり”をするべく新たな取組を調査研究している。

桜のまちづくりへの住民参加

静内町においては、昭和37年に桜並木保存会が地域の有志の方々により結成され、今日まで先人の遺業を継承するべく補植用苗畑の管理等を実施している。また、商工業者においても桜並木を町のシンボルとしてだけでなく、地場産業に結び付け活用しようとする動きも早くから活発に行われ、各種商品名や包装紙等に多数活用されている。平成８年においても“さくらちゃん”という名で地場産品の鮭、イクラ等海産物が商品化され、全国各地で好評を得ている。観光宣伝は、静内観光協会をはじめとする各団体・事業所等が積極的な活動を展開している。平成６年には課題であったホスピタリティ活動を展開するべくボランティアガイドサークルが組織され、会員60名による受入体制の充実が図られている。桜をはじめとするまちづくり全般に対する住民の意識は、年を重ねるごとに確実に向上しており、今後の展開が期待される。

桜のまちづくりへの住民参加の今後の展望

北海道・春の一大イベントとなった“しずない桜まつり”には例年、二十間道路桜並木周辺地域の収容能力を遥かに超える25万人もの観桜客が訪れており、地域の生活環境にも支障をきたす状況となっていることから、駐車場の増設をはじめ、イベント広場の整備等、各種の対策を講じる必要性に迫られている。これら諸対策の推進には、広大な用地の確保が絶対条件であることから、用地の提供等、地域住民はもとより町民あげての積極的な参加が期待されるところである。

二十間道路桜並木と周辺の牧場風景

宮城県柴田町

市町村の概要

仙台市から南へ30km、町中央部を白石川が流れる人口38,000人、世帯数12,000の県内最大規模の町。温暖な気候で稲作等が盛んな一方、東北の町村で第2位の製造品出荷額を誇る工業の町でもある。

桜の概要

毎年、4月10日から25日までの期間で、さくらまつりが開催されている船岡城址公園は樹齢約92年のソメイヨシノなど1,000本余りが咲き乱れる。船岡城址公園は、町南西部に位置する独立形山状の四保山にあり、歴史をたどってみれば戦国時代に船岡城が築城され、後に原田家が治めているのは、山本周五郎作「樅の木は残った」でご承知のとおりである。また白石川堤の桜は、「一目千本桜」の愛称で親しまれ、柴田町から大河原町に至る総延長８kmに約900本のソメイヨシノが植えられている。この桜は、大正12年4月白石川堤防改修工事完成記念として植樹され、残雪をいただく霊峰蔵王を背景にした景観は、県内屈指の桜の名所として観桜客の目を楽しませている。

船岡城址公園

桜の現状報告

樹齢が70年を超す老木が多く、毎年の施肥や剪定等によりその樹勢を何とか保っている状態であり、次世代への継承のため補植が必要となっている。平成５・６年度に、県事業による「白石川桜づつみ事業」が実施され、堤防の外側延長1100mに盛土を施し、堤防の強化を図りながら堤防上に桜の植樹・遊歩道・休憩所等を整備したものである。さらに整備を進めたいが、堤防外側の盛土部分の用地確保が困難なため、今後の事業実施は困難な状態である。

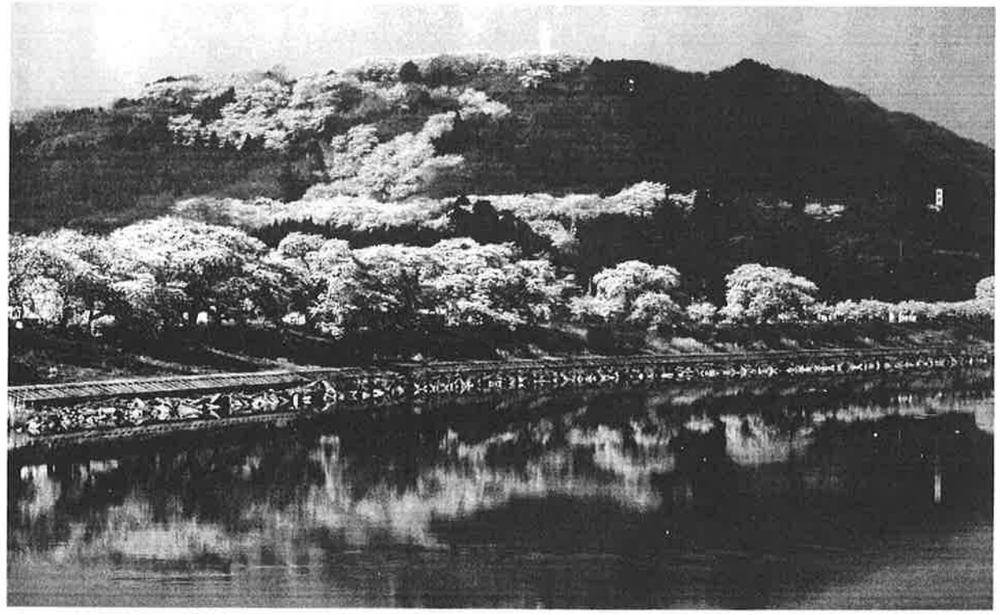
桜のまちづくりへの住民参加

平成4年度から町内の新生児を対象に、桜の苗木を希望者に無料で配布し、私有地に植栽してもらう「お誕生桜苗木配布事業」を始めた。そこで植栽された多くの桜の木は、子どもたちの成長とともに、すくすくと街のあちらこちらに育っている。また、先人たちの遺産でもある桜の木を受け継ぎ、次代に伝えていくためにも長期的な植樹と育成管理が不可欠であると前向きな考えをもった14人の町民有志が「柴田町さくらの会」を昭和53年に発足させ、「入学、結婚などのさまざまな記念に桜の植樹を」と、町内外に呼びかけ、植樹希望者を募り、毎年50本ずつ桜を町内の公共用地に植樹し、平成8年には、1,000本植樹達成記念式典を開催するに至った。現在会員数は111人に増え、一年を通じて美しい桜を咲かせるため活動している。これからも桜をこよなく愛するたくさんの人々によって、老木が保護され、「美しいまちづくり」が展開される。

桜のまちづくりへの住民参加の今後の展望

柴田町では平成9年に、町花である桜の育成管理を図り、永く後世に伝えるため、「さくら基金条例」を制定する。基金は、積立金及び寄付金等の収入を充て、貯金等の運用利益から、桜の育成管理に関する町事業やボランティア団体の活動に補助するよう計画している。

白石川堤一目千本桜



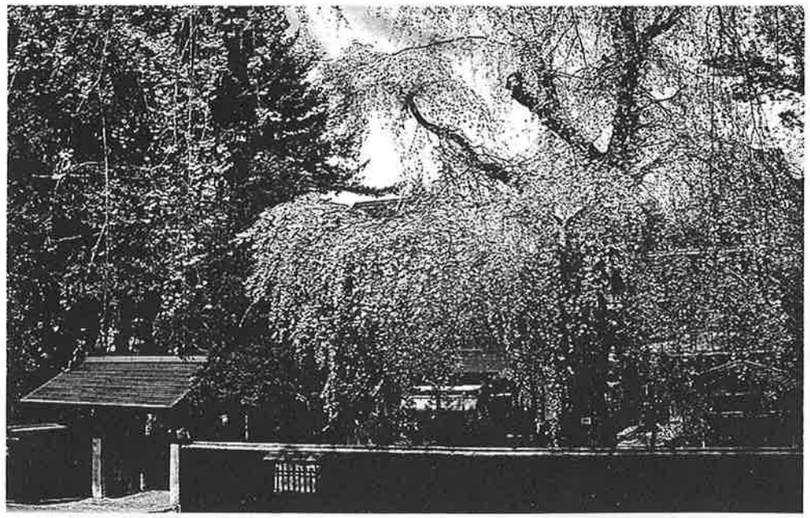
秋田県角館町

市町村の概要

秋田県の中央内陸部に位置し、人口15,416人、4,834世帯、清流玉川と桧木内川の合流域に沿って開けた町。元和6年の町並みが現存し、国の伝統的建造物群保存地区に指定され、武家屋敷と共に独特の景観を呈している。

桜の概要

毎年春、武家屋敷地内に400本余りのシダレザクラが咲き誇る。このシダレザクラは今から330年程前当地を治めていた佐竹北家2代義明の妻の嫁入り道具の中に、3本入っていたものが最初と伝えられている。現存するシダレは樹齢100歳から300歳で、この内152本が国の天然記念物に指定されている。一方、町の真ん中を流れる桧木内川堤に2kmの桜並木がある。昭和6年、時の政府は経済不況と凶作にあえぐ東北地方救済のため、東北振興事業をおこした。角館町はこれを桧木内川左岸堤防の築堤及び護岸工事にあて、7年起工、翌8年完成、この年今上天皇陛下がご誕生され、翌9年に600本を記念植樹した。その後、桜は見事に生長し、367本の桜を含めたこの景観が、わが国の優れた国土美として認められ、国名勝として指定された。



武家屋敷の
シダレザクラ

桜の現状報告

これまでの一般的な管理から一歩進んだ樹の診断治療が必要となってきており、先進地の技術事例を実践しながら当地独自の診断、治療技術を確立するため「樹木医」を養成していたが、この度、桜係が晴れて樹木医に認定された。これを機会に当地独自の診断、治療技術の確立を進めていく予定である。今後は、人間の生活環境と調和しながら桜を育てることを重点課題として保護に努めていく。

桜のまちづくりへの住民参加

●桜の植樹…桜を増やすため「桜の苗木プレゼント」を昭和58年度から実施しており、既に4,000本を数える。一方民間団体の「全山さくらの会」が山桜を主体に植栽活動を続けている。
●桜の管理…大手電力会社の営業所や町内の電気工事会社等が積極的に高所作業車をオペレーター付きで提供するなど側面的に桜管理を支援している。また地元の中学２年生の体験学習を兼ねて桜の施肥を行っている
●特産品開発…桜を使った染め物を樺染めと称し製品化の動きがある。
●観光・宣伝…町民の任意団体「トライアングル」が桜祭り期間中に観光案内をかってでるなど、各種の趣味の会が競いあって桜まつりを盛り上げている。

桜のまちづくりへの住民参加の今後の展望

桜は植栽するときは、皆喜んで植栽していただけるが、問題はその後の管理をいかにしていくかであると思う。植栽はすべて善良な管理と世話をしていかなければ意味がないと考える。一方、行政で管理すれば良いと言う方もいらっしゃるかも知れないが、全数をきめ細かく管理するには人や予算的に限界がある。行政主導より積極的な住民参加により桜は皆で守るという機運が生まれ、それが本当の意味での桜のまちづくりと言っても過言ではないと思われる。

桧木内川堤桜並木

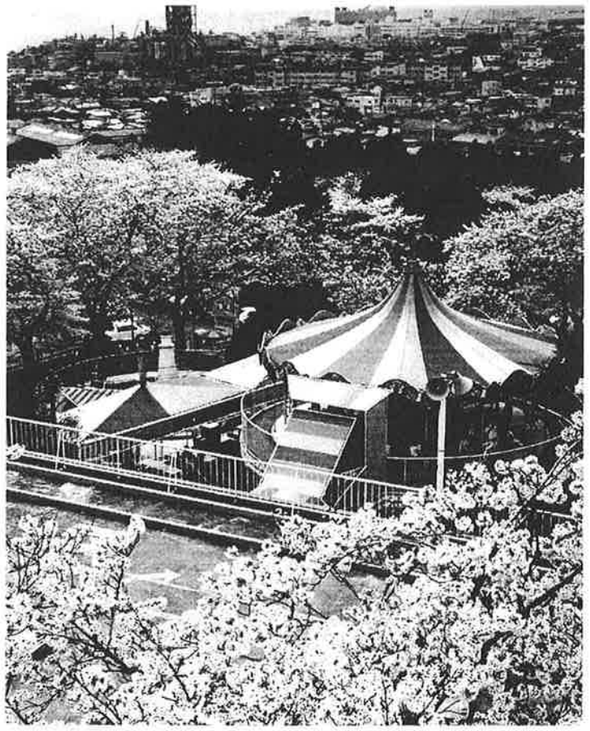
茨城県日立市

市町村の概要

水戸藩主徳川光圀が、「日の立ち昇るところ領内一」と讃えた古事から「日立」の地名となった。市民運動が盛んで、現在「創造とふれあいの都市・日立」を目指し生活圏の拠点性を高める事業の展開を進めている。人口197,824人、世帯数71,951のまち。

桜の概要

大正初め日立鉱山が煙害対策のため、オオシマザクラの苗を大量生産(15万本)し、山林に植えることを奨励。その後、鉱山社宅にソメイヨシノを植栽し、一大花見の名所を造成した功績を讃え、日立製作所役員が“桜塚”を贈るという事業が行われ、美徳として語り継がれ、現在でも保存されている。その後市内企業の工場や社宅にもソメイヨシノが植えられ、行政も昭和20年代後半「神峰公園」や「平和通り」にソメイヨシノを植林し、平成２年には（財）日本さくらの会の「さくら名所100選」に選定された。主なさくらの見所として、熊野神社境内、神峰公園、平和通り、企業団地内、助川城址公園～助川小学校等がある。



神峰公園桜

桜の現状報告

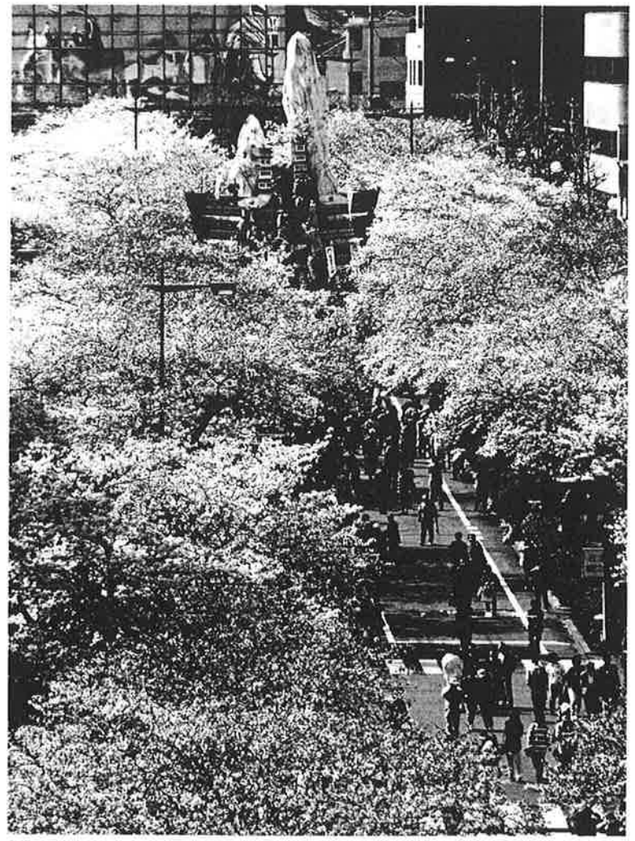
さくらと日立市の結び付きの経過から、日立市の象徴であるさくらを活かしさくらにこだわったまちづくりについて検討しようという動きが市民から出てきたことから、平成８年度「日立市さくらのまちづくり市民会議」「さくらのまちづくりを進める市民の会」の設立を行った。問題になっているのは企業用地内の空き地や学校等のソメイヨシノがテングス病にり患して衰弱化しているが、高木の上、地形上機械が入れない場所も多く、手が付けられず対応が遅れていることである。

桜のまちづくりへの住民参加

●市民団体の動き…「花樹の会（会員80名）」や「グリーンクラブ（造園業者を核とした60名）」等市民ボランティア組織の動きを中心に、商工会議所や青年会議所等既存の団体もさくらのまちづくりに関心を寄せているので、平成9年度中に「連絡会」的な情報交換の場を形成したい。
●桜の植樹…「花樹の会」を中心に市有林への植栽を2年ほど毎年1,000本のペースで行っている。(他は市や企業が業者委託により実施)
●桜の管理…特にテングス病枝の切除を「花樹の会」が呼び掛け、実践している。
●特産品開発…4年ほど前、民間を市が指導して「潮桜せんべい」を開発販売している。
●観光・宣伝…「日立さくらまつり」は、国指定の重要有形無形文化財である「日立風流物」が公開されることもあり、毎年30～40万人の見物客が訪れている。

桜のまちづくりへの住民参加の今後の展望

●日立市さくらのまちづくり市民会議（会長 宮崎哲雄 委員16名）－さくらのまちづくりを市民と行政が共同で行う具体的事項を「提言書」にまとめ市長に提案(平成9年10月目途)、また提言した事項に関しての実現状況の観察及び実効性を上げるための進言をしていく。
●さくらのまちづくりを進める市民の会(会長 古田土 勇 公募会員63名)－5つの専門部会に分かれて各々の会員が知恵を出し合い実践活動を展開していく。



平和通りの桜と風流物

群馬県鬼石町

市町村の概要

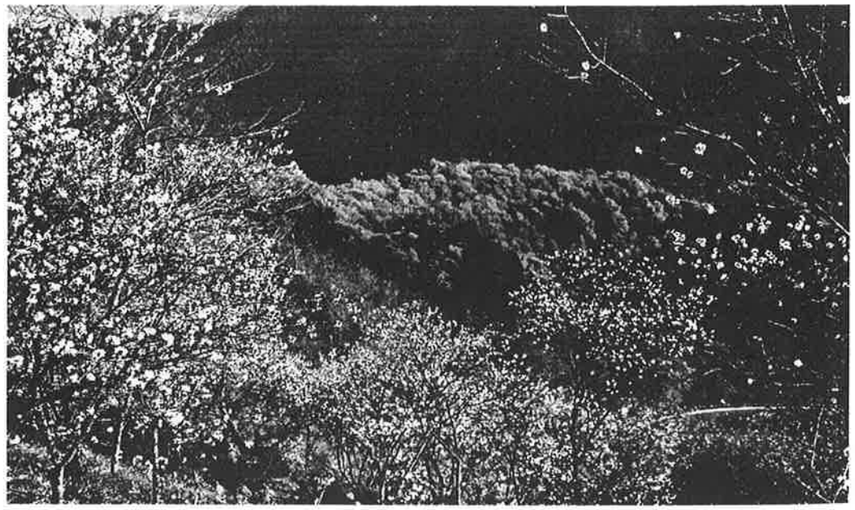
群馬県の西南部に位置しており、人口7,900人、2,400世帯、気候は温暖で、美しい山々や清らかな流れの自然に恵まれ、優しい心の人々が楽しく暮らす町。特産品には全国一を誇る冬桜の名所三波川で栽培されるりんご等がある。

桜の概要

明治41年、国から払下げを受けた山林に旧三波川村の村長が、日露戦争の戦勝を記念して桜の苗木1,000本を村民の協力を得て植栽。この中に冬桜の苗が混じっていたと思われ、一部が3～4年後の冬に開花。年を経るに従い桜樹中の約３割が毎年同期に開花、美観を呈するようになった。昭和12年には、名勝天然記念物「三波川(桜)」として国の文化財指定を受けている。昭和48年、山林火災により冬桜の大部分を焼失したが、住民の協力により復興。現在の桜山公園は、平成2年に完成した「県立桜山森林公園」を含め、45haの森林公園で、年間20万人以上の観光客を迎える観光拠点である。7,000本の冬桜は、春と冬の二度美しい花を咲かせる幻想的な桜で、殊に冬には周辺の紅葉と見事なコントラストを描く。

桜の現状報告

冬桜は、10,000本を目標に毎年植樹を続けているが、てんぐす病や膏薬病等の病害が懸念されている。町では、文化庁の文化財保護事業等を活用するとともに、企業や住民の協力を得ながら毎年、駆除・消毒を行っている。桜山公園は、冬桜開花期以外でも町民が憩い楽しめ、町外からも1年を通して誘客が図れるよう、アクセス道路の改修を進めるとともに第2次整備を計画しているところである。



彩る桜山公園

桜山公園にて

桜のまちづくりへの住民参加

●桜の植樹…冬桜の育苗は地元住民が行っており、近年は、これを町が安価で買い上げ、地元住民に賃金を支払い植樹している（有償ボランティア）。地元青年会議所では、昨年度より町民希望者に冬桜の苗を無料配布している。

●桜の管理…昭和29年の町村合併により三波川村が鬼石町になったのを契機として、桜山は三波川財産区の管理となり、旧三波川村村民全戸で構成する三波川桜山保存会を組織し、冬桜の育成と桜山の維持管理等を続けてきたが、桜山の公園整備（平成２年）以降は町の管理となっている。

●特産品開発…昭和55年、桜山の麓に農産物直売所が建設されたのを契機に、地元地区住民により桜山観光組合が組織され、翌年には桜山リンゴ組合が発足し、冬桜リンゴの栽培が始まった。公園整備により農産物直売所も新たに整備、桜山観光組合以外の販売も行われるようになった。

●観光・宣伝…地元住民には、イベントや観光客の案内・テレビ放送時等にも積極的な協力をいただいている。

桜のまちづくりへの住民参加の今後の展望

冬桜は、三波川地区の宝のみならず、鬼石町のシンボルであり誇りである。町民の理解と協力無くしては、冬桜を育み続け、観光拠点として桜山公園を発展させることはできない。今後の整備においても、町民の声を十分に反映させたものにしていかなければならず、維持管理等にも住民が直接参加できる方策を検討したい。

埼玉県幸手市

市町村の概要

関東平野のほぼ中央、埼玉県の北東部に位置し、北は茨城県、西は千葉県に接している。平成8年に市制施行10周年を迎えた人口約58,000人、18,000世帯のまち。

桜の概要

市内北部の権現堂堤が桜の名所として知られている。堤は約400年前に築かれ、江戸期を通して江戸を水害より守った。大正9年に約4里に渡り桜が植栽されたが、戦中から戦後にかけて伐採されてしまう。その後、昭和24年に地元住民等により桜の植栽が進められ、現在約1kmに渡り約1000本の桜が続き、例年大勢の花見客で賑わっている。(平成8年実績として延べ約60万人)

権現堂堤の桜は、トンネル状に満開になった桜と、周辺に植えられた菜の花とのコントラストが見どころである。

桜の現状報告

「さくら10万本運動」として、市内への桜植栽、苗木や鉢植え桜の配付、植栽状況の調査の他に、市内小学校に対して年間を通して桜の学習活動を行う「桜育成指定校」、桜の古木の保護を目的とした「桜保存樹木制度」等を行っている。また、従来ソメイヨシノに偏りがちだった植栽工事を、十月桜やヒマラヤ桜などを含めて実施し、春以外の季節にも桜を楽しめるようにしている。

その他、平成9年度完成予定の「さくらふれあい広場」工事(約18,000平方m)や権現堂桜堤を含めた(仮)権現堂公園整備計画等が進められる。

今後の課題として、権現堂堤内の樹勢の衰えた桜に対する管理・治療活動の推進が挙げられる。

権現堂桜堤

桜のまちづくりへの住民参加

●桜の管理…地域住民有志(20名)により権現堂桜堤保存会が結成され、今後、以下の内容について活動を行う。

①権現堂桜堤の自然環境の保護/ゴミの持ち帰り運動、クリーン作戦等

②権現堂桜堤の観察と記録/桜や動植物の観察、自然災害による危険箇所の点検等

③桜まつりへの協力と参加/イベントへの協力、桜関連の物産開発、情報発信等

桜まつりへの住民参加

●桜の植樹…市が自治会等の集会所に桜の植栽を行い、植栽後は地元で管理を行っている。また、市で提供した用地に、希望者が桜を植栽し管理を行う「さくら里親制度」を検討している。

●特産品開発…平成7年より幸手市商工会が事務局となり、特産品開発アクションチームが組織され地元の商工業者により特産品の開発が進められている。特徴として桜の香りに注目しルームコロンやお香等が挙げられる。また、さくらドレッシング等食品関係の物産開発も進められている。

●観光・宣伝…4月に権現堂堤で開催されるさくらまつりについて、東武鉄道沿線へのPRや報道各社への情報提供を行っている。(平成8年はTBSテレビ、アッコにおまかせ収録等、民放3社により中継される。)また、地元商店会がまつり期間中に幸手駅から会場までの間に茶店を出し、花見客への湯茶等のサービスを行っている。

桜のまちづくりへの住民参加の今後の展望

これまで市が実施してきた桜の植栽や管理について、市民の意識が高まってきている。

今後は管理面を充実させるために、従来の活動と並行して前述の権現堂桜堤保存会への援助や、埼玉県緑の推進員と協力して管理知識の普及啓発等を行っていきたい。

また、観光活動や特産品開発も充実してきており、これからの展開に期待が持てる。

東京都北区

市町村の概要

東京の北部に位置し、今年区制５０周年を迎える。人口326,000人、世帯数147,000。王子・十条製紙など近代製紙工業発祥の地として紙製品グッズを活性化のツールとして開発している。また東京初の防災センター、古河庭園の他、桜の名所として飛鳥山、岩淵水門周辺を有する。

桜の概要

東京の桜の名所の一つである飛鳥山公園の桜は、徳川8代将軍吉宗の時代に桜や紅葉を植栽したことに始まる。以来、江戸庶民に開放された飛鳥山は、関東でも有数のお花見の名所として賑わいを見せた。明治6年、太政官布達によって飛鳥山は日本最初の公園として指定された。戦後数度の大規模改修によって、現在では飛鳥山舞台や井桁噴水など桜と水と自然石の調和による趣豊かな歴史公園として評価されている。岩淵水門は甲武信岳を水源とする荒川の氾濫を治めるために大正12年完成した治水水門である。隅田川の起点であり、その堤一帯は古くからの桜の名所となっている。現在一帯を知水公園として桜を移植し、仮称知水博物館が本年秋の完成に向けて建築中である。そのほか桜の見所は、都市公園百選に選ばれた音無親水公園などのほか区内に万遍なく点在している。

飛鳥山公園と北とぴあ

桜の現状報告

北区の木は「桜」となっていることから、一級河川「荒川」における水辺環境整備事業を始め、公園、児童遊園、街路樹等の整備において可能なところに桜の植栽を行っている。また、現在行っている飛鳥山公園の整備工事では、桜については将来800本となるよう一層の充実を図ることとしている。一方、飛鳥山公園の一部に郷土博物館、紙の博物館、渋沢史料館の３博物館が平成10年3月下旬の開館を目指し建設中で、「桜」をテーマとした開館特別展示を企画制作中である。

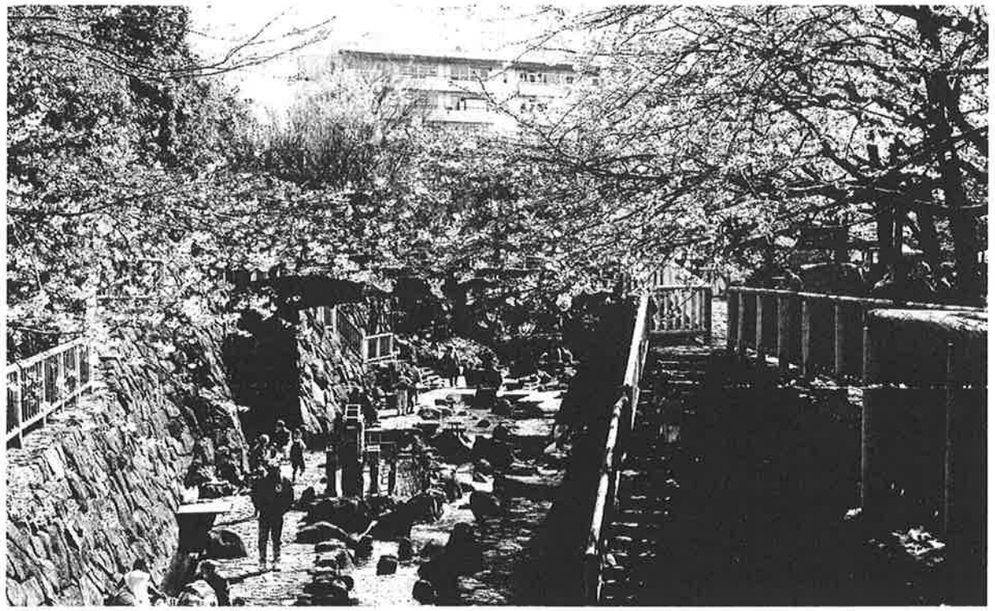
桜のまちづくりへの住民参加

区内の桜のほとんどは、自治体による植栽、管理されたものである。しかし緑化の推進は当区の環境行政の大きな柱であり、緑の普及啓発事業の中では、特に郷土史としての「桜と飛鳥山、岩淵水門など」を柱としている。また地域の緑化活動リーダーである「みどりの協力員」、「みどりの推進員」を通して北区の桜についての情報提供などを実施している。春秋２地区で行われる「区民植木市」や「桜草まつり」、商店街連合会主催の「さくらまつり大売出し」、「赤羽馬鹿まつり」など桜を主題とした住民参加型イベントが開催されている。春秋実施されている市民緑化用苗木配布事業においても秋にはソメイヨシノ、やまざくらを配布している。

桜のまちづくりへの住民参加の今後の展望

北区では区の知名度とイメージを高めるために区の魅力を分かりやすく演出し、そのイメージを区外に発信するために北区の木「桜」の花びらをデザイン化したコミュニケーション・マークを作成した。現在企画部にイメージ戦略室を設置し、平成10年の春の3つの博物館の開館特別展示の基本テーマを中心に区民ぐるみのイメージアップの更なる推進を目指している。公園、道路等の桜は公施設として管理されているので、これをいかに住民にとって身近な桜にするかが課題である。

音無親水公園



新潟県加治川村

市町村の概要

北緯38度線が通る村「加治川」は、北蒲原平野のほぼ中央に位置する人口7,720人、1,800世帯の純農村である。豊かな自然に恵まれ、良質なコシヒカリを主体にした米及びしいたけ、花等の産地である。

大峰山

桜の概要

日本地図上で日本一小さい山脈である櫛形山脈の中央にある標高399.5mの大峰山と大峰山北方大沢の谷を隔てた国有林の尾根を中心に桜樹林がある。この椽平桜樹林には、オオヤマザクラ・オクチョウジザクラ等約40種、1,000本の桜があるといわれている。長い年月を経て自然に交配されたヤマザクラの変種は、花の色やつぼみの大小、葉のつき方等、他に類がないことから昭和９年１月22日に国の天然記念物に指定された。また、建設省の「桜堤モデル事業」として「長堤十里の桜」と全国にその名をうたわれた加治川に名勝の桜の復元を目指し、加治川村を含む４市町村で、全長58.6km、総本数約6,000本のソメイヨシノの植栽が進められている。また植栽された桜の里親制度を設け、桜の情報等提供している。

桜の現状報告

国の天然記念物である椽平桜樹林と国指定の金山城館遺跡に隣接する地に、世界の桜109種類269本を植栽した約5.2haの桜公園は、東屋や遊歩道も整備され平成９年春にオープン予定である。この公園では、四季を通じて観桜できる公園を目指し整備されたもので、一度に多くの種類の桜を見ることができることにより桜への知識を深めることができ、大峰山への散策と併せて利用への期待がもたれる。

桜のまちづくりへの住民参加

平成3年に、桜の里づくりと会員の親睦・研修を目的につくられた村民主体の「さくらの里づくりの会」は、現在会員172名で主に次のような事業を行っている。①桜公園等関係施設への視察　②桜盆栽教室の開催　③桜ボランティア事業（加治川堤桜・大峰山椽平桜樹林手入れ）④結婚記念樹（桜の苗木）の贈呈、桜盆栽教室は、会員有志で桜の盆栽づくりに取り組んでおり、将来村の特産品として、村施設での展示即売を計画している。また、村内在住の結婚したご夫婦に桜の苗木を記念に贈呈し、村内の桜を点から面へと拡大し、さくらの里づくりの一助を担うべく事業を推進している。その他に、桜の花を利用した桜の塩漬けをふるさと便に入れ、都会のふるさと会員に発送したり、ＪＡの女性グループでは、桜の押し花はがきやキーホルダーづくりに取り組んでいる。

桜のまちづくりへの住民参加の今後の展望

公共施設での桜の植栽が、ほぼ整備された状況であり、成木に成長するまでの間、桜の保護・維持管理には多額の経費が見込まれる。現在、桜の管理は行政主体となって行っているが、さくらの里づくりの会で取り組みを進めているボランティア事業をより多くの住民参加の下に推進していく必要がある。また、加治川村の花「桜」をもっと身近に楽しんでもらうために、桜盆栽、桜の花を利用した食材、押し花等特産品につながるものの開発が検討課題である。

桜盆栽

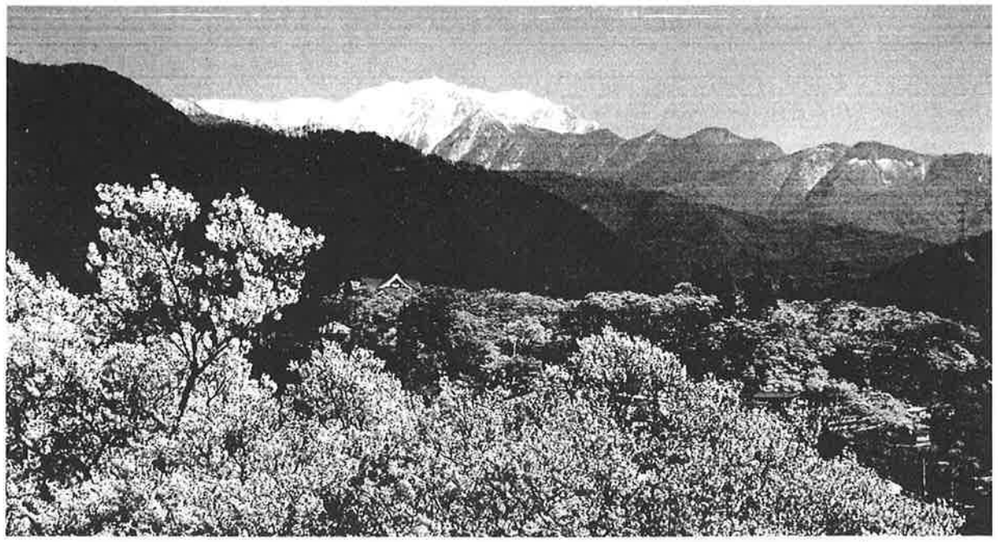
長野県高遠町

市町村の概要

高遠町は長野県の南部の7,700人、世帯数2,400世帯の山裾の城下町。特産品は歴史のある高遠饅頭、高遠焼、木材の彫刻製品が主なものである。

桜の概要

高遠は鎌倉時代の高遠氏に始まり江戸時代の内藤氏まで城が形成され、南信濃の中心地として栄えてきた。戦国時代には武田信玄が本格的な城塞を築き、江戸時代は会津藩始祖の保科氏を始めとした高遠藩三万三千石が置かれ、城下町が発達した。廃藩置県により高遠城は取り壊され、あたりは一時荒廃したが、明治8年有志が近くにあった桜の植樹をして高遠城址公園としての整備が始まり現在に至っている。この桜はタカトオコヒガンザクラというコヒガンザクラの仲間としては大木となり花も赤みが強い特種な桜で、樹林は県の天然記念物に指定されている。今では、1,500本が4月中旬に咲き誇り、天下第一の桜として花見に関東、中京方面から40万人が訪れる。



高遠城址公園

桜の現状報告

高遠さくら計画に基づき花見の期間の延長を図るため、さとざくらを中心にした桜の見本園と五色のさくら園の造成と、タカトオコヒガンザクラの保護育成のため、高遠城址公園に次ぐ樹林の形成を花の丘公園整備として進めている。問題は嫌地現象による桜木の衰退と再植樹、ウソによる食害、国史跡指定、他市町村のてんぐす病、観光客の踏圧等多くの課題を抱えている。

桜のまちづくりへの住民参加

県の植樹祭、町の植樹祭には桜の植樹を行っている。花の丘公園の桜は全て植樹祭によるもので、町内の個人、団体に呼びかけて植えたものである。特に町の植樹祭では木製のネームプレートを作成し植樹した人の名前を苗木に表示した。また、タカトオコヒガンザクラの苗木を植えていただける方に無料配布を行い拡大を図っている。

町で管理している桜はおよそ7,000本で桜守により行っている。その他の桜については桜憲章を制定し、町の宝として町民が守っていくよう努めている。

クリスタルフラワー（桜の花を樹脂硝子の中に閉じ込めたもの）、高遠焼に桜のデザインを取り入れたものを現在試作中。また、桜の苗木そのものの販売も考えている。商工会では婦人部が桜の塩漬を製造販売している。さらにＪＡではさくらがゆの缶詰を製造し友好盟約している新宿区の非常食に指定されている。

桜のまちづくりへの住民参加の今後の展望

桜からの町づくりを拡大し、花の町づくりとして展開中で、町の花の会の設立や花づくりの補助制度、海外の花事情の研修視察などを実施している。現在目覚ましい効果があり、町内のあちこちで花が見られるようになってきた。今後は補助などがなくても住民が自ら率先して花の町づくりが推進されることを望んでいる。桜については、一自治体の問題ではなく広域的な管理が必要ではないかと考えている。

桜雲橋とコヒガンザクラ

奈良県吉野町

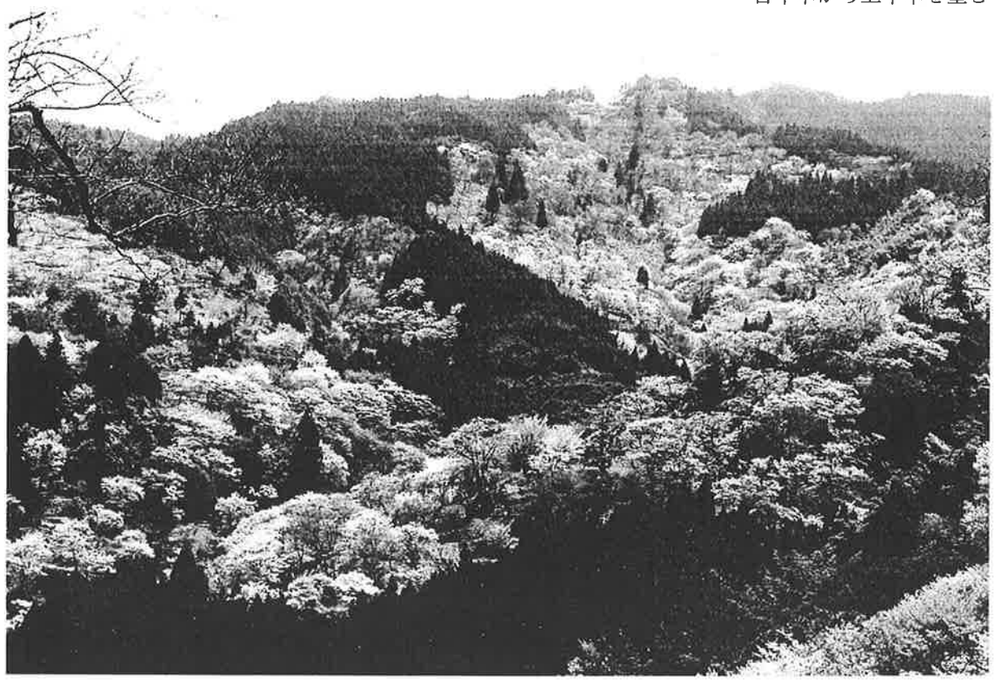
市町村の概要

奈良県のほぼ中央に位置し、人口12,600人、3,830世帯、市街地に接して約30キロ平方メートルにも及ぶ国立公園がある。また町のいたる所に名所、旧跡、文化財が散在し、緑豊かな自然観光地として広く知られている。

桜の概要

吉野山は古来から桜の名勝地としてつとに知られているが、今から1,300年前、山岳宗教「修験道」の本尊、蔵王権現のご神木となり、役行者の神秘的な伝承と修験道が盛行するにつれ、蔵王権現を祀る金峯山寺への参詣も盛んになり、ご神木の「献木」となって植え続けられてきた。その後も桜の寄進は相次ぎ、天正７年には、大阪平野の豪商末吉勘兵衛が10,000本の桜を寄進したという記録が残っている。また、文禄3年には、豊太閤秀吉が総勢5,000人の供ぞろえで花の宴を開いたのを始めとし、吉野山の観桜に西行や芭蕉、良寛等多くの文人墨客が来山している。吉野山の桜は、全山で約30,000本、そのほとんどがシロヤマザクラである。桜は麓の下千本から中・上・奥千本とおよそ１ケ月かけて咲き競っており、その景色は見ごたえがある。

一目千本から上千本を望む



桜の現状報告

数年前から、吉野山の桜は往年に比べ、花の量、その艶も少なく、目に見えて衰退してきた。そこで、県林業試験場の樹医に調査してもらった結果、１.寿命、２.病害虫の発生、３.環境の変化、４.管理不足が原因としてあげられ、現状のままだとあと10数年で急激に衰退していくといわれた。そこで、県・町、主に桜を管理している財団法人吉野山保勝会が中心となり「吉野山さくら対策検討委員会」が設けられ、活性化に向け桜樹林を調査し、その方策を報告書にまとめるとともに桜の管理体制強化に努めている。

桜のまちづくりへの住民参加

「吉野山さくら対策検討委員会」が作成した桜樹林管理暦に基づいて財団法人吉野山保勝会が行っているが、年数回の下草刈りや施肥などは、地元の方々の全面的な協力を得て実施している。また地元の吉野山小学校では、昭和23年の春から「ふるさとの桜を大切にすることを通して子供を育てよう」と、児童が桜への関心をより深くするために、桜んぼを拾い、種まきからはじめ、桜の苗を育てている。育てた苗は、卒業記念に吉野山の公園内に記念植樹したり、国内外を問わず希望者に配布している。また、平成４年からは住友信託銀行が金銭信託の運用益を桜のために役立てようと広く一般から募集し、その信託収益を財団法人吉野山保勝会に寄付する「吉野山桜トラスト」がスタートし、全国各地の多くの人から信託収益を寄付していただき、桜の活性化に利用している。

桜のまちづくりへの住民参加の今後の展望

桜の危機を迎えている今、町では20数年前から実施している、町民への「桜無償配布」事業もここ数年は、申し込み者が非常に多くなっていることから、住民の桜に対する関心度は以前にも増して高くなっているように思われる。今後も全山の桜を修景することになった吉野の歴史的な資源を活かし、他の町内の観光拠点とそれぞれのもつ相互性を位置づけ、観光地のネットワーク化を進めることにより、住民が桜を含めたまちづくりに参画していただけると思う。

満開の桜の中の国宝蔵王堂

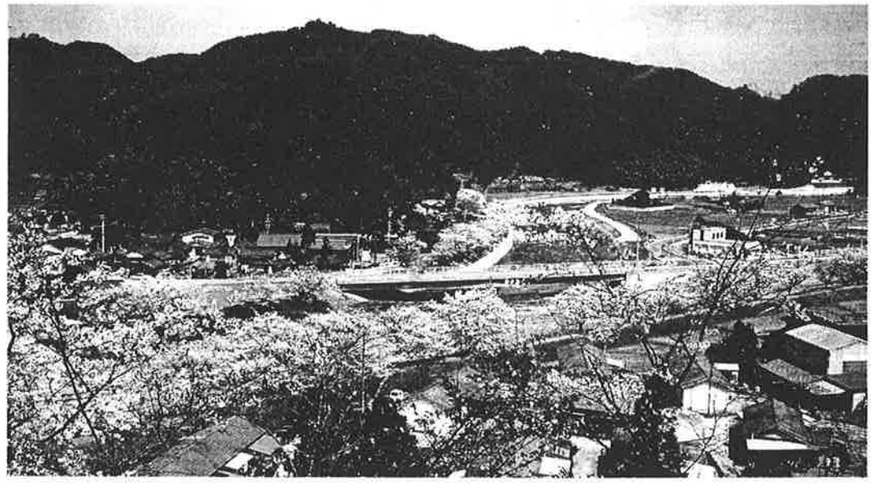
鳥取県西伯町

市町村の概要

中国地方、山陰にある本町は鳥取県西部の島根県境に位置し、人口8,300人、2,300世帯、米と和牛、薪炭生産の町として知られている。農業構造改善事業や住宅団地造成、企業誘致等々により兼業化が進んでいるが、一方でダム湖を拠点とした観光開発にも着手している。

桜の概要

江戸時代、出雲街道の宿場町として発達した本町では、法勝寺城山公園（法勝寺城跡）で例年4月上旬～中旬まで花まつり期間とし、毎年多くの町内外の住民の憩いの場になっている。期間中は公園一帯が桜の花に包まれるため、ボンボリ（700個）が設置され、川面に映る夜桜見物も行われている。また、4月14日～15日は、全国でも数少ない郷土伝統文化財「一式飾り」や「上長田神社春季大祭」が行われ、中央公民館主催の地区住民の公民館まつりと共に桜のこの時期は一年で最も賑わう時を迎える。主な見所は、法勝寺城山公園及び法勝寺川堤防（1,000本ソメイヨシノ）、妙見山公園（300本ソメイヨシノ）緑水湖周辺（1,000本ソメイヨシノ）がある。



尾崎城址より望む

桜の現状報告

本町の桜は、昭和30年前後から植樹されたものがはじまりであり、樹齢40年を超える老木の数も多い。近年中に迎える桜の世代交代に備え、本格的な植樹が必要となってきている。桜の保護・育成は、地域づくりに積極的に取り組んでいる住民ボランティア団体、河畔倶楽部に依るところが大きい。河畔倶楽部は、昭和26年に発足し、以来今日まで桜の植栽や肥培管理、天狗巣病り患枝の除去、下刈り、散策路の整備、桜の木籍づくり等、「桜」によるまちづくりに大きく貢献している団体である。

桜のまちづくりへの住民参加

本町では、平成元年、多目的ダムの完成にともない新しく誕生した湖（緑水湖）周辺でダム完成記念町民緑化大会を行い、町花の桜1,000本を植栽し湖の完成を祝った。また、昭和45年の住宅団地造成の際には500区画の住宅予定地に桜を配置した。現在では、結婚された町内のカップルに対する記念植樹も実施している。桜の管理については、住民ボランティアによる活躍が大である。河畔倶楽部はその運営を会費のみにより一切の補助を受けず、無償奉仕の精神で現在の桜を40年の長きにわたり育て上げた。河畔倶楽部に誘発されるように、現在では新たな住民ボランティア団体（天津クラブ）が結成され、桜の育成や公園管理を行っている。これらボランティア団体の熱意が行政を動かせ、現在の桜をつくったといっても過言ではない。桜のこの時期には、江戸時代から本町に伝わる「一式飾り」が同時に開催され、法勝寺周辺は10,000人もの観光客で賑わいを見せる。

桜のまちづくりへの住民参加の今後の展望

桜にかかわる地域づくりに積極的に取り組んでいる、現在の２つのボランティア団体と連携をとりながら、地域単位での新たなボランティア団体の育成をはかり、桜を主題とした町民全てがかかわりを持つまちづくりを進める必要がある。

法勝寺川土手そぞろ歩き

島根県木次町

市町村の概要

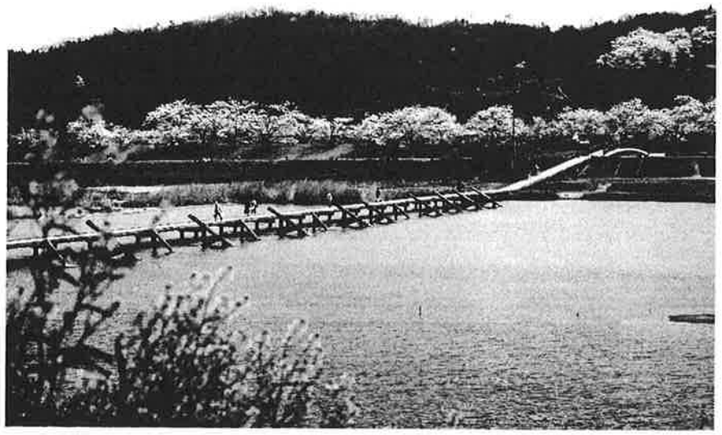
島根県出雲部の中央に位置し、古くから当地方の中心として栄え、現在は木次拠点工業団地を中心に企業誘致が進んでいる。また、「健康の町」を宣言し「心、体、社会」の健康づくりを進めている。人口10,400人、世帯数2,900の町。

桜の概要

平成2年3月、「日本さくらの会」より、日本さくら名所100選に認定された「きすき桜並木」は、斐伊川の清流にそって約２ｋｍにわたり桜トンネルとして、中国随一の名所としてその名をはせている。

この斐伊川堤の桜は、明治の終わりごろから町民の手によって植えはじめ、本格的には昭和の初めに土手の両側に植えられ、多年町民が愛情をそそぎ、今を盛りとして町のシンボルとなっている。

現在、約1,300本の桜が斐伊川堤、木次公園などにあり、シーズンにはボンボリ点灯、ライトアップなどで夜桜が楽しめ、また、期間中（3月下旬〜4月中旬）は数多くのイベントや特産品テント村などが開設される。



斐伊川と桜並木

桜の現状報告

本町は昭和62年、総合振興計画「チェリープラン」を策定し、シンボル事業として、日本一の桜のまちづくりを掲げ、保育管理の徹底、植栽の推進を図ってきたところである。

さらに、桜の神様といわれた、故笹部新太郎氏が開発され昭和62年に新品種として認定された笹部桜を平成5年から8年にかけて500本苗木を譲り受けることができ、現在町内に植栽を進めるとともに、バイオによる増殖を県林業試験場にお願いしており、木次笹部桜としてブランド化を図り普及を図っていく計画である。

問題点としては、公共用地等主だったところは既に植栽を終わり植栽地がなく、新たな桜公園計画が急がれることと、町民の桜に対しての積極的な関わりが希薄であり、ボランティア等を利用した桜の管理等を今後検討していく必要があることなどがあげられる。

桜のまちづくりへの住民参加

植栽については、町民からの要望により、桜の苗木を配布し、植栽を行ってもらっているが、町が主に植栽を行っており、町依存型になっている点は否めない。また、町が植栽計画を行っても家のそばなどは、植栽を嫌われる場合もある。

保育管理については、桜並木の地元自治会並びに老人クラブの皆さんが自主的に草刈り等をされる場合もあり、また、町からお願いする場合もあるが、基本的には町が保育管理をほぼ全面的に行っている。

特産品の開発については、平成3年に「木次さくら生産組合」が設置され、桜に関する特産品の開発を行っている。この組織は農村部の婦人が中心となり、木次町森林組合が事務局となって運営を行っており、今までに「桜茶」、「桜煎餅」の開発を行ってきた。現在は、「さくらうどん」の開発を進めているところである。

観光宣伝については、町の観光協会が主体となって行っており、住民参加まではいたっていない。

桜のまちづくりへの住民参加の今後の展望

本町は、桜に関することについては、「健康の町木次さくらの会」で行っている。現在、個人、団体を含め165会員であり、会員の拡大を図っていくことが必要である。

また、各自治会において桜推進員の設置を現在検討中であり、地域住民から桜に対する盛り上がりを期待するものである。

一方、桜の維持管理についても、地域住民の積極的な取り組みが望まれ、ボランティアグループの育成が必要である。

斐伊川堤防桜並木

高知県佐川町

市町村の概要

本町は、高知県のほぼ中央部、高知市の西方27kmに位置する人口約15,000人、世帯数5,500の町。高吾北地域の交通、通信、文化、経済の中核として位置付けられている。

桜の概要

牧野公園の桜は、明治35年、牧野富太郎博士が東京染井で発見した桜の種ソメイ吉野を送ってこられ、それを地元の有志が植えたことに始まる。大正４年、町が1,300本のソメイの苗木を購入し、町内の道路沿いや各地区に植えたことで、名所「桜の佐川」として有名になり、その中心が奥の土居（牧野公園）であった。戦時中は、食料増産ということで畑に開墾されたが、昭和24年、町、商工会等より桜やつつじなどが植えられ再び花見処となった。牧野公園には、平成７・8年度で、売店棟、便所、駐車場、植栽等の工事を行い、四季を通じて利用できる憩いの場として整備をした。約2,000本の桜は、古い街並みとあいまって、情緒あふれる花見ができ、県下一の花見処である。

桜の現状報告

公園内の桜は、50年を超す古木が多く改植の時期に来ている。牧野公園整備事業や他の事業と合わせて補植、改植を行っている。

桜のまちづくりへの住民参加

行政からの呼び掛けや、住民からの自発的運動は次の通りである。

●桜を増やすための植樹参加

●桜の管理…観光協会、商工会青年部、老人クラブ等による草刈りやてんぐす病の除去を行っている。

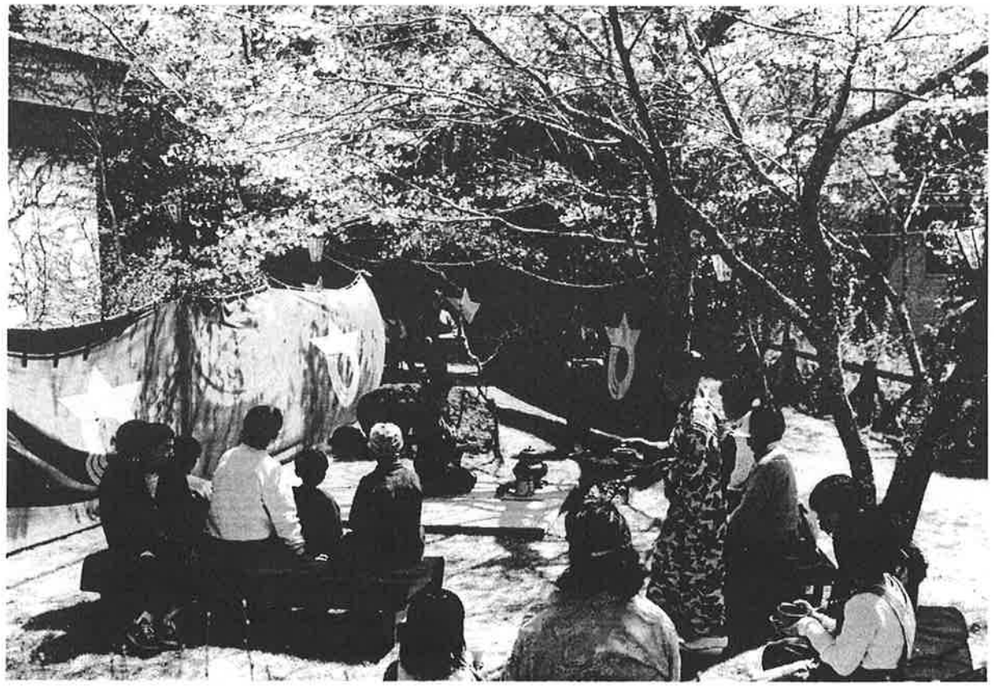
●特産品開発…観光協会、生活改善グループ協同による土産物開発を行っている。地元の酒造会社の酒、精米時にできる米粉、また塩漬けした桜を利用した「よいざくら」の商品化に取り組んでいる。

●観光・宣伝…花見時期には、花見キャンペーン、テレホンサービス、桜にちなんだイベントの開催、インターネットホームページの活用などを計画している。

桜のまちづくりへの住民参加の今後の展望

本町の尾川地区を原産とする「稚木の桜」（牧野富太郎博士によって「プリヌスオガワナ」と学名が付けられた。）を、地域の数名のグループが種子から栽培し、道路の土羽などに植栽し、普及宣伝に努めている。

牧野公園の桜



野点

長崎県大村市

市町村の概要

長崎県の中央部に位置し、東西12km、南北16kmと南北に長く、総面積126.29平方kmを有する人口79,000人、28,000世帯の市。日本初のキリシタン大名大村純忠などに代表される「歴史」は「花」と並んで広く知られている。

桜の概要

長崎県随一の桜の名所として知られる大村公園は、大村藩主の居城であった玖島城跡で、約21haの広さを誇り、近年、桜を中心とした公園に整備され、桜のほかツツジ、花しょうぶ、アジサイと花の期間が長く続き、3月25日から6月20日まで花まつりとして賑う。

桜の数は、ソメイヨシノ1,500本、オオムラザクラ300本、八重桜200本とあわせて約2,000本ある。

中でも、国指定の天然記念物であるオオムラザクラは、八重桜の二段咲きで花弁の総数が60～200枚もある優雅な花で、里桜中の名花といわれ、花の咲く4月上旬は多くの見物客が訪れる。

そのほか、野岳湖キャンプ場や琴平スカイパークはハイキングを兼ねた桜の名所として、家族連れなどに人気がある。

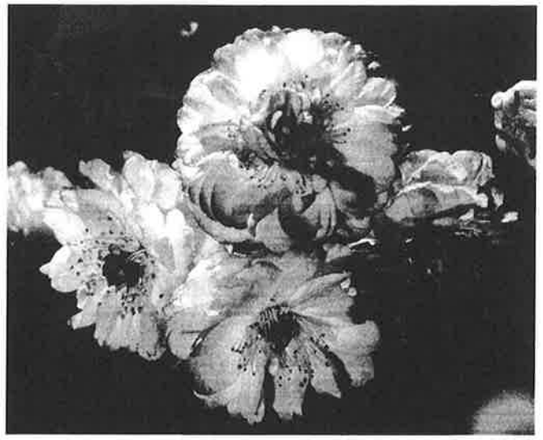
大村公園

桜の現状報告

市内全体を見てみると「桜」をシンボルにしている割りには桜が少ないので、平成7年度より「桜の無償配布事業」を行うとともに、公園整備などにおいて桜を植栽するなど、名実共に桜のまちとなるように努めている。

また、国指定天然記念物であるオオムラザクラの保存育成については、地元の高校が研究を続けるなどの活動が行われている。

なお、以前は国道沿いに3kmにわたって桜並木があったが、排気ガスなどの影響で、その姿が消えていっている。



オオムラザクラ

桜のまちづくりへの住民参加

平成7年度から取り組んでいる「桜の無償配布事業」は、平成7年度492本、8年度（12月現在）740本の実績を挙げており、9年度1,000本の配布を予定している。

配布対象としては、7年度は市内の企業や団体等を対象としていたが、8年度からは個人にも配布している。

市民にも桜に対する関心が高まっており、公園などに桜の記念植樹などが行われるようになった。

また、市内の製菓業者により「おおむら桜まんじゅう」が開発されるなどの努力も続けられているが、桜を生かした特産品開発についての取り組みは活発な状況であるとはいえないのが現状である。

桜のまちづくりへの住民参加の今後の展望

桜の無償配布を通じて桜の植栽は盛んに行われるようになり、桜に対する関心の高まりなどが見られるようになってきたが、これからの課題として維持管理の問題が生じてくるものと思われる。

そのためには、いかにして自分たちの桜として育てていくか住民の意識の高揚を図る必要がある。

住民に桜を愛する心が芽生えてくることが、桜のまちづくりに対する住民参加に繋がり、展望が開けてくると思われる。

熊本県水上村

市町村の概要

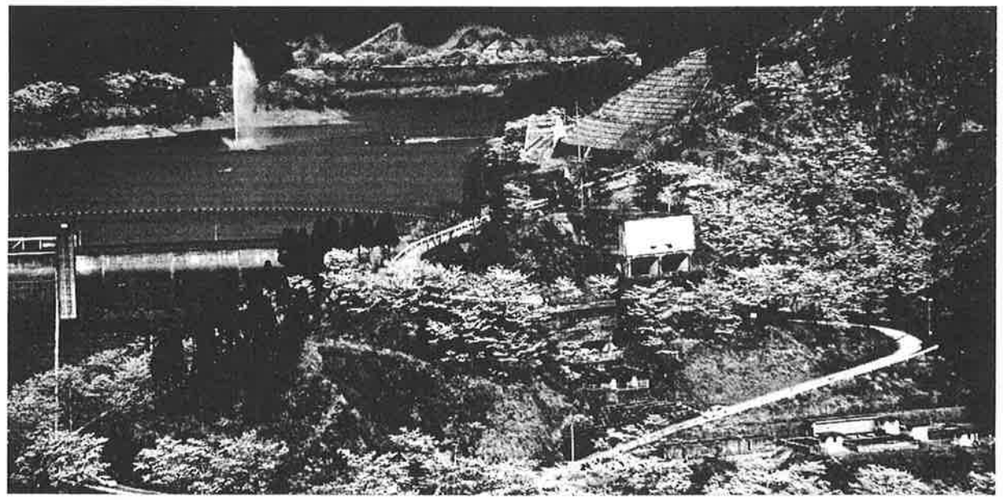
熊本県の東南部、宮崎県との県境に位置し、総面積192,11平方kmのうち約92％が森林に囲まれている人口約3,000人、1,000世帯の村。日本三大急流の一つ、球磨川の源がある自然豊かな村。

桜の概要

昭和35年、村の中央部に市房ダムが完成し周囲の景観整備として昭和37年にダム湖の周囲約15kmに10,000本の桜が植栽された。その後、昭和59年から始まった「くまもと日本一づくり運動」のなかで、当時の県知事であった細川護熙氏の提唱により、市房ダム湖周辺で25年育まれた10,000本の桜を核にしたむらづくりということで「日本一の桜の里づくり」が始まった。現在、ダム湖周辺にはダム完成時に植栽されたソメイヨシノを主に、10数種類・約25,000本の桜が見頃となっている。

また、数100種類あるともいわれる桜のうち、本村の気候に合うものの中から100種250本を選定し、桜の見本園として整備した桜図鑑園では、2月下旬から5月上旬及び10月から11月にかけて桜の花を見ることができる。

市房ダム湖の一万本桜と噴水



桜の現状報告

現在一番の問題となっているのが、ダム周辺のソメイヨシノが樹齢35年を越え、樹勢の衰えとともにテングス病が蔓延し始めたことである。樹の片側はダム湖面上に枝を伸ばしており、すべての病枝の切除ができないこともその原因の一つと思われる。

また、桜のオーナーを募集し、オーナーの森を4カ所に設けているが、毎年のような台風による倒木、枯死等があるため桜の木の生育に大きな差が出てきている。

桜のまちづくりへの住民参加

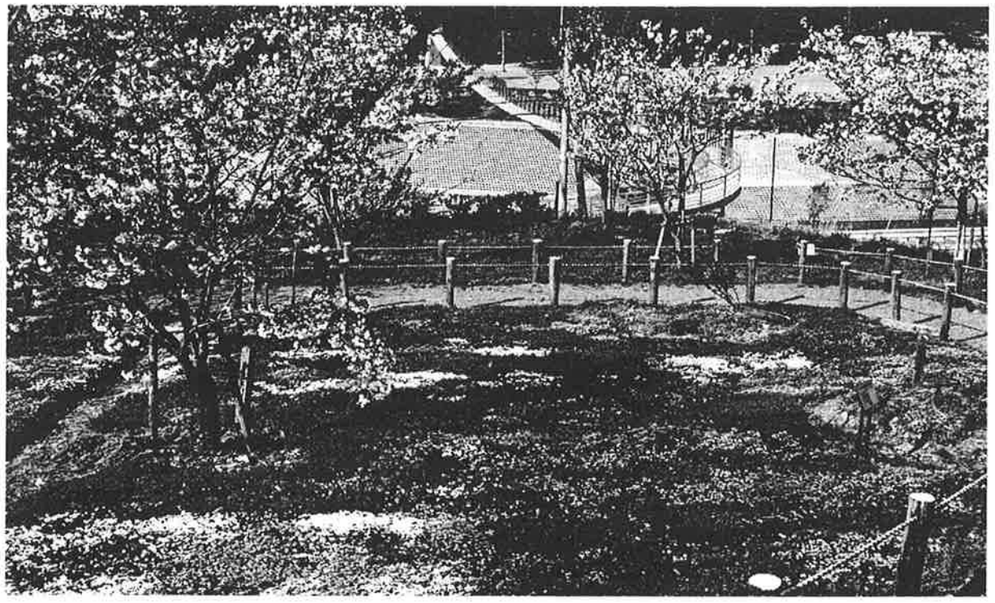
本村で行われている桜のまちづくりへの住民参加については、昭和60年に桜の里づくり運動の支援団体として『桜おこし組』が結成され、桜まつりの企画・運営を受け持っている。また、最も大きな住民参加の例として毎年7月頃行っている桜の一斉下草刈りがある。この活動は、村の呼びかけによりダム湖周辺約15kmを行政区ごとに区分けし、ボランティアで各戸より1名ずつ参加してもらい桜の下草刈りを行うものであり、毎年約900名が参加している。

特産品の開発としては、昭和60年より桜おこし組の中の木工部会が、桜材など村内の様々な木材を活かしたぬくもりのある手作りの木の器の開発に取り組んでいる。昭和62年には「桜工房」を建設し、食器・花器などの商品として製作を開始し、現在7名の部会員が、それぞれ趣向を凝らした商品を各自で販売している。これまでに、熊本県の伝統工芸館での実演・販売や、東京の両国国技館でのイベントなどに出展している。

桜のまちづくりへの住民参加の今後の展望

日本一の桜の里を目指し、住民参加の桜の里づくりを続けていくために是非とも取り組みたいのが、桜の苗木の育成・販売を村民で行うということである。現在、村内に桜の種類は数十種類あるが、その桜を使った苗作りを行いたいという住民は今のところ現れていない。そのため、桜の苗木はすべて外部業者への発注で取り寄せている。今後桜の里づくりを進めていくうえで重要な部分といえるのではないだろうか。

桜図鑑園



宮崎県北郷町

市町村の概要

さくらのまち日本一を目指し、昭和56年から桜の植栽運動を展開している。温暖な気候と人情豊かな、人口約5,500人、1,800世帯の緑と清流と温泉のまち。

桜の概要

370年の歴史を誇る飫肥杉のまちで、この豊かな杉林の緑の中に、色鮮やかに春の訪れを知らせてくれる山桜が数多く生息しているところである。植栽は、自治公民館や各種民主団体、誘致企業等の協力のもと、公共施設周辺や沿道修景など約18,000本程度の植栽を完了している。また、当町は宮崎日南海岸リゾート開発の保養・歴史リゾートゾーンに位置づけられ、静かな高原にリゾートホテル、ゴルフ場が整備されているほか、周辺には緑豊かな自然を生かしたレクリエーション施設や公園を多く有している。また、町内主要各施設には県南屈指のそれぞれ異なった泉質をもつ温泉が供給されている。特に花立高原にはリゾート施設の整備とともに、桜のまちづくりの拠点として桜公園に10,000本の桜が植栽され、今後も整備が計画されている。

町の全景

桜の現状報告

現在も住民参加による植栽運動が展開されているが、植栽箇所にも限界があることや維持管理（特に台風による倒伏）等に手間がかかるなど、管理体制を整備していかなければならない。また桜の苗の植栽や桜を基調とした新たな展開の道を探求していかなければならない。また、既存の山桜も山林の伐採などにより減少の傾向にあり、これらの保護対策も講じていかなければならない。

桜のまちづくりへの住民参加

昭和55年から「桜」によるまちづくりのため、地域住民の手による桜の植栽運動を展開している。また56年から「チェリータウン事業」を展開しており、毎年、町内の自治公民館に約300本の桜を配布し、各地区の公園・広場・道路等に植栽が行われている。また花立桜公園には、現在まで10,000本の桜を植栽しており、年2回の下草刈を行っている。その他「チェリータウン事業」における桜の植栽本数は、蜂之巣公園2,800本、学校・企業等1,000本等がある。

桜のまちづくりへの住民参加の今後の展望

近年、全体として、桜によるまちづくり運動の限界が伺える状況もあり、例えば山桜の保護を意識付ける事業の展開やイベント、桜の苗作り体制の整備等を通じて「桜」にこだわりをもつ団体や個人の活動を助長するなど、桜を基調とする住民運動の拡大を図っていく必要があると考える。

花立桜公園

新潟県上越市

市町村の概要

上越市は、奈良時代以来、越後国の政治・経済・文化の中心として栄え、いたるところに歴史遺産が残されている。とりわけ、中世から近世の越後のシンボルであった春日山城跡・福島城跡・高田城跡が知られている。

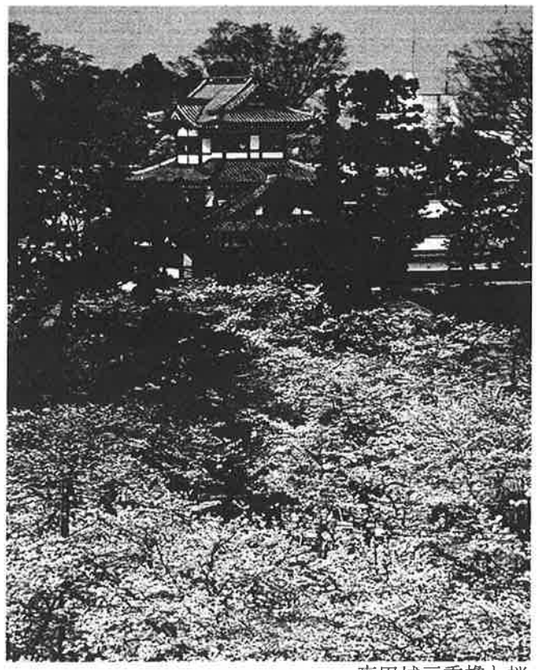
現在、人口133,698人、43,367世帯であり、港湾整備、火力発電所の建設、上信越自動車道、北陸新幹線など数多くの大型プロジェクトが進行し、対岸諸国と三大都市圏のゲートウェイとして発展している。

桜の概要

高田公園の桜は、ソメイヨシノを中心として約3,400本植えられており、お掘の水面に映える景観は、三大夜桜の一つと語り継がれてきた。徳川家康の六男松平忠輝公が築いた高田城の城跡をそっくり公園とし、市民の憩いの場として利用されている。

歴史を遡れば、この桜は、陸軍第13師団の入場を祝い、在郷軍人団の呼び掛けにより寄付が集まり、明治42年3月に2,200本の桜を植樹したのが始まりである。その後、多くの先人たちが補植、管理の努力を続けてきたことにより、雄大な景観を残している。

昭和50年には、園内に桜見本園として変化に富んだ品種を植樹し、現在、10数種の桜が、訪れた人々の目を楽しませている。また、豊かな自然を守り、美しいふるさとを育てようという市民の願いを込め、昭和55年3月に市の木として「桜」を制定した。



高田城三重櫓と桜

桜の現状報告

現在、高田公園の桜の主役は、昭和30～50年代に植えられた、青年期から壮年期を迎えたソメイヨシノである。

明治から昭和初期に植えられた桜は老木となり、幾度もの豪雪による枝折れの跡が見られるが、いまだ華やかな開花を見せてくれる。昭和60年代以降に植えられた若木も、成長の早いものは驚くほどの太さに育ちつつあり、世代交代の役割を果たしている。補植には、主に樹高4m程度のソメイヨシノの苗木を用い、雪にも負けないよう工夫をして植え込んでいる。

桜のまちづくりへの住民参加

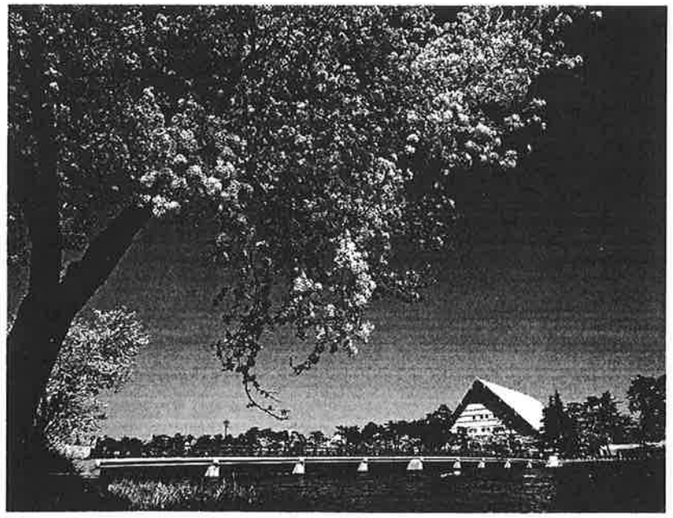
●桜の植樹…昭和50年に、市民ぐるみで花と緑のまちづくりを進める目的でつくられた「花と緑のまちづくり協議会」では、各町内での植樹や新築家庭への記念樹（桜とツバキ）の贈呈を行い、新築記念樹では現在までに900本の桜の苗木が市内に植樹されている。また、「さくらの会」や「ロータリークラブ」等の市民・企業・団体から、高田公園に昭和61年以降約250本の桜の苗木や肥料の寄付を受けてきた。

●桜の管理…町内や個人で植栽した桜は、市が防除機械と薬剤を提供するなど、地元で管理を行っている。公園の桜については、市で管理している。

●特産品…桜を素材に使った羊羹、カステラ、饅頭、煎餅等の菓子類。また、桜の樹皮を煮詰めて染め上げたハンカチやスカーフ等の草木染めなど桜をいかした土産品がある。

●観光・宣伝…平成6年度に会社員や主婦など市民ボランティアからなる「上越観光案内協会」が発足し、約20名が観光客に、桜の名所高田公園内を案内している。

当市では、昨年、市民との共同作品である自前の「のびやかJプラン」を策定した。そして、桜を生かしたまちづくりについて、プランの「久比岐野みどり構想」および「桜とみどりの高田公園整備事業」の中で位置づけ、8年度に「1万本の桜が咲き誇るまちづくり推進委員会」を官民一体となって組織した。



高田公園西堀橋の桜

桜のまちづくりへの住民参加の今後の展望

「1万本の桜が咲き誇るまちづくり」の推進には、市民の理解と協力が必要であり、推進委員会で桜の植栽や管理などの検討を行い、より多くの市民に参画をしていただき、活動の輪を広げていきたい。

MEMO

MEMO

第9回 さくらサミット in 上越

お問い合わせ／上越市通商産業部通商産業企画課　Tel.0255-26-5111